

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 24 日現在

機関番号：14403

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520584

研究課題名(和文) 英語中間交替の視点による日・英語自他交替における生成文法と外国語教育の融合的展開

研究課題名(英文) From the Viewpoint of English Middle Alternation: Integration of Generative Grammar and Foreign Language Education on Transitivity Alternation in English and Japanese

研究代表者

松本 マスミ(Matsumoto, Masumi)

大阪教育大学・教育学部・教授

研究者番号：10209653

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円、(間接経費) 1,110,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、英語中間交替の視点から英語および日本語の自他交替における「ずれ」を検討し、松本は英語中間構文分析の基本となる多重動詞句の構造の精緻化を通して、英語無生物主語構文は中間構文との比較により理解度を高めることができることを提案した。

長谷川は、自動詞・他動詞の対応が形態的变化を伴う日本語と一般的に伴わない英語の違いが英語圏日本語学習者の日本語習得を困難にしている点を整理し、日本語教育にフィードバックした。

西光は、日本語では責任が他動詞の使用に大きな役割を果たし、英語では原因が決め手となることを確かめると同時に、ひとりことにおいて日本語では自動詞がよく使われることを確認した。

研究成果の概要(英文)：In this study, we have explored the gap between transitivity alternation in English and Japanese from the viewpoint of the English middle alternation. Matsumoto has elaborated the structure of the multiple VP as the basis of the analysis of English middle and proposed that the comparison of the inanimate subject construction with English middle enhance Japanese native speakers' understanding of the construction.

Hasegawa has classified the cases in which native speakers of English find it difficult to learn Japanese because transitivity alternations in Japanese, but not in English, show morphological changes and has given a feedback to Japanese language education.

Nishimitsu confirmed the two facts: First, the key concept for transitive verbs is Responsibility in Japanese, whereas it is Cause in English. Second, intransitive verbs are frequently used in a prompt soliloquy in Japanese.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・英語学

キーワード：中間構文 生成文法 日・英自他交替 外国語教育 日本語教育 誤答分析 誤文訂正 他動詞構文

## 1. 研究開始当初の背景

中間構文(例 This vase breaks easily.) は、英語の自他交替の代表的構文であり、生成文法では、他動詞文や受動文の他、使役交替における能格文(例 The vase broke.) との比較において、その統語的特性と意味的特性について、多くの研究がなされてきた。

藤田・松本(2005)では、ミニマリスト・プログラムの元で徹底した統語的分析を追求した反語彙主義の立場から、中間構文を分析し、中間構文の意味的・個別特性(動詞クラスに対応する制限、アスペクト的特性における制約、個体レベル述語としての特性など)を、三層分裂 VP という基本的構造で説明した。

さらに、松本は、中間構文に関する基盤研究(B)(平成18年度~20年度)において分担研究者として認知言語学の視点も取り入れ、中間構文における生成文法と認知言語学の統合についてのワークショップをコーディネートし、中間構文研究に関する総括を行うとともに、構造で起因する意味はシンタクスで扱うことができることを示した。

一方、松本(2010)では、生成文法を英語教育に活用する議論の中で、中間構文の用法は英和辞典の中で、「~(ら)れる」「~してある」「~されている」という複数の日本語訳が与えられていることを指摘すると同時に、大学生にとって英和辞典の自動詞の意義の中から中間構文の用法を選ぶのが難しいという調査結果にもとづき、英語の中間交替と日本語の自他交替との間にかんがりの「ずれ」があることを明らかにした。

これらの背景から、英語中間構文をさらに厳密に分析し、同時に日本語母語話者の真の中間構文を含む英語の自他交替の理解のためには、英語という一言語に留まらず、日本語の自他交替との比較と両言語の自他交替におけるネットワークモデルの構築が必要であるという今回の申請テーマを得るに至った。松本はこれまで Matsumoto(1997)で中間構文と日本語の「られる」の比較について研究したことがあるが、それ以外の日本語学と日本語教育に関する知見を得るために、は長谷川が分担研究者として加わった。さらに、日英語対照研究の第一人者でありネットワークモデルの必要性を示唆した助言者である西光に分担研究を依頼した。

## 2. 研究の目的

本研究は英語中間交替の視点から英語および日本語の自他交替における「ずれ」を検討し、記述・理論の両面において英語と日本語の自他交替のネットワークを構築し、そのモデル化を行うことを目的とする。その際、現代理論言語学の主要アプローチである生成文法と英語教育学、日本語学、日本語教育学の各観点を統合させ、日・英語における中間交替・使役交替の分析に各分野の知見を取り入れるとともに、その成果を英語教育・日

本語教育にフィードバックするという、理論研究と実践研究の双方向のインタラクションによる融合的展開を試みる。

具体的には、英語中間構文の総称性・法性・状態性とそれに相当する日本語の「られる」「てある」「られている」を中心に、生成文法の枠組みにより統語構造と意味構造の関係についてさらに精密な説明を与え、日本語教育学の立場からは、習得が困難な自動詞・他動詞の使い分けに関する問題点とその解決法を探り、互いにフィードバックを行うことにより分野横断的な統合的枠組みを提案する。

## 3. 研究の方法

本研究は、生成文法による中間交替の分析に英語教育、日本語学、日本語教育の知見を取り込み、より精緻な中間構文の分析を行うとともに、中間構文に対応する複数の日本語構文の特性とその関係を明らかにすることによって、日・英語の自他交替のネットワークモデルの構築と文法理論と外国語教育の間のフィードバックによる統合的成果を目指すものである。研究態勢としては、松本が統括を行い、生成文法と英語教育を松本が担当し、日本語学・日本語教育を長谷川が担当し、日英対照・英語教育・日本語教育については西光が担当し、互いに研究成果と情報を交流させることによって中間交替の視点による日・英語の自他交替のより精緻なモデルを追求する。

## 4. 研究成果

### (1) 全体的成果

本研究における各研究者の成果は次の通りである。

松本は英語中間構文研究に必要な4つの側面(意味的特徴、制約・条件、中間構文内の語句、中間構文と比較される構文)を提案した。また、英語中間構文のモダリティや日本語の「~(ら)れる」「~ている」分析の基本となる構造の多重動詞句、特に原因(Causer)を指定部を取る句によって英語中間構文における責任性が統語的に説明できることを再確認した。さらに、日本人英語学習者が無生物主語を理解する際、中間構文と比較するとわかりやすいことを提案した。

長谷川は、日本語教育学の立場から、英語を母語とする学習者を中心に、自動詞・他動詞の対応が形態的变化を伴う日本語と、一般的には形態的变化を伴わない英語との違いから生じる日本語学習者の自動詞・他動詞の使い分けに関する問題点を整理した。さらに、「有対他動詞」の対立する自動詞の習得など、学習者にとって習得が困難な点について考察を行い、日本語教育の授業においてフィードバックを実施した。

西光は日本人英語学習者と英語圏日本語学習者の自動詞と他動詞の誤用を観察することにより、日本語では責任が他動詞の使用

に大きな役割を果たし、英語では原因が決め手となることを確かめた。また、日本語と英語の鏡像関係から、誤文訂正4段階モデルを創案した。さらに、日本語ではとっさのときにひとりごとで自動詞がよく使われるが、英語では基本的にひとりごとを避けるので、とっさのときの発話はそばにいる人に向けて発せられることを確認した。

以上を本研究独自の取り組みである英語学、日本語学、英語教育、日本語教育、日・英対照における相互のフィードバックという観点からまとめると、次のようになる。

英語学 日本語学

中間構文と関連構文の多重動詞句構造

(日本語「られ」とVoiceP, 責任性)

英語学 英語教育

中間交替との比較による英語無生物主語の指導

日本語教育 日・英対照

有対他動詞における形態変化の有無

日・英対照 英語教育・日本語教育

日・英語の鏡像関係 誤文訂正4段階モデル

英語教育・日本語教育 日・英対照

責任と原因

とは、責任・原因という概念が、日英自他交替において重要な役割を果たしているということを示している。また、は、方向性は逆であるが、形態変化・鏡像が共に日本語教育における指導のヒントになることを示している。

## (2)各年度の成果

各年度における成果は次の通りである。

平成23年度は、本研究の方向性を確認し、3年間の基盤となる研究を行った。全般的な活動として、本研究のウェブサイト立ち上げ、本研究の目的と内容について、広く社会に発信した。また、毎月約1回の研究打合せでは、日英対照研究と英語教育、日本語教育の現状について情報交換を行い、英語教育と日本語教育における学生の反応と、日英対照研究が相互に活用できることを確認した。さらに、平成23年度の本研究のまとめとして、平成24年2月に西光を講師として第1回橋渡しことばの会による英語挙行講演会を開催した。高校英語教員を含む参加者との意見交換により研究成果をフィードバックできた。また、平成24年3月には、松本が編者の1人であり、松本と西光の論考を含む計42編の論文集『最新言語理論を英語教育に活用する』が出版された。

松本は、個体述語としての中間構文と日本語の「られる」のモダリティ解釈の統合的分析の基盤となる研究を行った。アメリカ言語学会年次大会では、心理動詞における名詞句の組み合わせ方を中間構文の研究に活用するヒントを得ることができた。英語教育では、中間構文と無生物主語構文の違いを指導する際に、中間構文における名詞句の移動とい

う生成文法の考えを用いることを提案した。長谷川は、ロンドン大学 SOAS で日本語教育を中心に、資料収集を行った。また、大学の日本語の授業において、英語母語話者の学生を中心とした学習者の誤用についての観察を行った。

西光の研究では、日本語と英語の自動詞・他動詞および受身について日本人英語学習者の誤用と英語話者日本語学習者の誤用を並べてみると鏡像関係になることがわかり、それに基づき、誤文訂正4段階モデルを創案し、そのモデルに基づく練習問題を作成した。今後はそれをさらに精密化してゆき、他の現象にも広げて行き、誤文訂正モデルを改訂していく基盤をつくることができた。

平成24年度は、これまでの研究を引き続き進めるとともに、最終年を見据えた研究を行った。全体的な活動としては、2ヶ月に約1回の研究打ち合わせで、日英対照研究、英語教育、日本語教育、言語学・外国語教育におけるコーパスの利用などについて情報交換を行い、各メンバーの研究についても議論を行った。

また、平成25年1月に、長谷川信子神田外大教授を講師として、第2回橋渡しことばの会による英語教育講演会を開催し、小学校英語から大学英語教育にいたるまでの言語学が英語教育に果たす役割についての知見を得た。さらに、平成25年度に実施予定の中間構文についてのワークショップについて企画・準備を行った。

松本は、中間構文の特性を4つの視点から再びまとめなおし、新しい方向性を見いだす際の出発点とした。また、ラレル・テイルの分析の基本となる動詞句構造について、Travis (2010)の提案を他の研究と比較しながら考察し、日本英語学会機関誌に Review として掲載されることになった。また、生成文法を英文法に応用した中村(2009)を授業で用いたり、英語学の授業の受講生を対象に上記の長谷川教授の講演会についての反応を調査したりして、英語学を英語教育に応用する可能性を探った。

長谷川は、外国語としての日本語学習者の自動詞・他動詞の使い分けに関するデータを収集し、「有対他動詞」であるにもかかわらず対立する自動詞が習得できないケースについて考察した。また、日本語教育や日本語文法の授業で自動詞・他動詞の使い分けや習得について取り上げ、学習者へのフィードバックを試みた。

西光は、本科研による研究成果を日本英文学会北海道支部における招待講演において公表し、有益な意見交換を行った。日本語と英語の自動詞・他動詞・受け身文の現象的な一般化をさらに精密化した。

平成25年度は、研究のまとめとして、国際ワークショップ English Middle and Beyond を開催した(9月29日)。松本は統語構造で中間構文を説明する事例を紹介し、3名の招待

講演者がギリシャ語の中間構文、日本語の受動文、生物言語学的見地からの多重動詞を中心に発表し、いずれも中間構文を含む自他交替の説明に動詞句の多重構造及び VoiceP が重要な役割を果たしているということと一致し、ヴォイスの日・独共同研究という今後のプロジェクトの展開に向けて準備を始めた。また、定期的に代表者と分担者の間で研究会を開催し、各メンバーの研究について意見を交換し、英語教育と日本語教育への応用について議論し、各自授業や講演でフィードバックを行った。

松本は、引き続き中間構文と自他交替の研究を続け、それを英文法指導法の授業で活用し、フィードバックを試みると同時に、ワークショップの発表から「ている」「られる」についての示唆を得て中間構文の研究を進めた。また、日英語の植物名についての形態論的研究をまとめた。

長谷川は日本語学習者の自動詞・他動詞の誤用例として、「有対他動詞」の対立する自動詞の「非用」を中心に分析を行い、中級以上の学習者に見られる、「有対他動詞」を受身形や可能形にして用いる例を抽出した。対立する自動詞がない他動詞の受身形が自動詞と同様の役割を果たす構文との相違点に着目し、自動詞・他動詞の習得上の困難点について、日本語作文や日本語文法の授業で学習者へのフィードバックを試みた。

西光は日本語用論学会の談話会と神戸大学ホームカミングにおいて日本語と英語の自動詞と他動詞の対照研究を概括し、日英語におけるひとりごとの占める位置の違いによって説明を試みた。また日本英語学会の接続表現に関するシンポジウムにおいて談話における自動詞と他動詞の出現に関する日英語の違いを考察した。

### (3)国内外における位置づけとインパクト、今後の展望

平成 25 年に、西光は、日本英語学会のシンポジウムにおいて、本研究の成果である談話における自動詞と他動詞の出現の日英比較を発表した。

平成 25 年に、本科研プロジェクトの主催で、国際言語学ワークショップを開催したが、ワークショップの講師の 1 人である Alexiadou シュツットガルト大教授と松本が共同研究を行うことになった。また、松本の提案で、ワークショップを発展させたものとして、平成 26 年 11 月の日本英語学会でシンポジウム「動詞句とその周辺をめぐって：語彙範疇と機能範疇の役割」が実施されることになった。

平成 24 年、平成 25 年に、本プロジェクトの柱である各分野のフィードバックという趣旨にもとづく「橋渡しことばの会」を開催し、高校教員を含む様々な分野からの参加者があった。この趣旨に賛同した第 2 回講師の長谷川信子神田外大教授がこの取り組みを

引き継ぎ、松本も執筆した長谷川氏編の『日本の英語教育は、今（仮題）』の出版が確定している。また、今後も引き続き「橋渡しことばの会」を開催する予定である。

以上のように、本プロジェクトは、英語学や言語学内における理論的貢献にとどまらず、英語教育や日本語教育の実践に貢献し、今後もさらに展開していくことが期待される。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 9 件)

松本マスミ「植物と名付け：日本語の複合名詞を中心とした概観」『大庭幸男教授退官記念論文集』査読無、2015 (掲載決定)。

Matsumoto, Masumi “Review: Travis, L.D. (2010) Inner Aspect: The Articulation of VP” English Linguistics (日本英語学会) 30 巻 1 号, 査読有, 2013, 381-391.

松本マスミ「TOEFL ITP®テストとの 10 年間その 2」『TOEFL Web Magazine』 査読無, 2013 年 4 月 9 日号, 2013, (ページ番号無)。

松本マスミ「TOEFL ITP®テストとの 10 年間その 1」『TOEFL Web Magazine』 査読無, 2013 年 3 月 19 日号, 2013 (ページ番号無)。

西光義弘「人文系論文指導の方法を探る」『人文科学系アカデミックライティング指導のための基礎的研究(科研報告書)』査読無, 2013, 1-13.

松本マスミ「データから見た英語中間構文の特性」『大阪教育大学英文学会誌』第 58 号, 査読無, 2013, 25-37.

長谷川ユリ「日本留学の動機・体験・効果交換留学生を中心に」『大阪教育大学紀要第 部門教育科学』査読無, 第 61 巻 1 号, 2012, 169-184.

長谷川ユリ「体験学習を通じて学ぶ日本日研生のための授業「大阪の文化」を例として」大阪教育大学国際センター年報, 査読無, 第 18 号, 2012, 2-7.

西光義弘「こだわりからの開放 Jes Allwood (1976) Linguistic Communication as Action and Cooperation, Gothenburg Monographs in Linguistics 2, University of Goteborg, Dept of Linguistics, pp.1-257.」『英文学研究支部統合号「関西英文学研究」』(日本英文学会)査読有, 第 4 号(第 5 号), 2012, 367-372 (65-70).

〔学会発表〕(計 17 件)

西光義弘「「城崎にて」の原文と英訳 8 種による接続表現の日英対照研究」日本英語学会第 31 回大会シンポジウム(招待講演)2013 年 11 月 10 日, 福岡大学。

長谷川ユリ「コミュニケーション能力向上のための教室活動」平成 25 年度大阪教育大学公開講座「日本語教育入門」(招待講演)

2013年11月9日,大阪教育大学天王寺キャンパス.

西光義弘「なにが日本語と英語の根本的な違いを引き起こしているのか?ひとりごとからの考察」第8回神戸大学ホームカミングデー文学部講演(招待講演)2013年10月26日,神戸大学.

Matsumoto, Masumi “An Extended View on English Middle” 大阪教育大学国際言語学ワークショップ English Middle and Beyond (招待講演)2013年9月29日,大阪教育大学天王寺キャンパス.

長谷川ユリ「大阪教育大学における留学生支援」奈良県立大学人権教育研修会(招待講演)2013年9月13日,奈良県立大学.

松本マズミ「TOEFL テストと大学英語教育」英語教育ワークショップ at プリティッシュヒルズ(招待講演)2013年8月21日,プリティッシュヒルズ.

長谷川ユリ「大学の留学生獲得戦略の視点から見た日本語教育」第28回国立日本語教育研究協議会(招待講演)2013年5月24日,東京海洋大学.

長谷川ユリ「国際社会と日本 男女共同参画の視点から」平成25年度フローラルセンター男女共同参画社会作り講座(招待講演)2013年5月24日,柏原市フローラルセンター.

西光義弘「ひとりごとと他動性 日英対照による語用論の基盤に関する提案」日本語用論学会談話会(招待講演)2013年4月6日,関西大学.

安部文司・松本マズミ「英語IIaにおけるTOEFL ITP 受験の必修化」グローバル人材育成のための留学推進シンポジウム(招待講演)2013年3月16日,大阪教育大学天王寺キャンパス.

長谷川ユリ「外国語としての日本語教育 教室活動と教材の活用」平成24年度大阪教育大学公開講座(招待講演)2012年11月17日,大阪教育大学天王寺キャンパス.

西光義弘「日本人英語学習者の間違いを訂正する効果的方法」日本英文学会北海道支部第57回特別講演(招待講演)2012年9月29日,北海学園大学.

西光義弘「言語研究の解雇と現在の状況および将来の方向」人工知能学会第65回言語・音声理解と対話処理研究会(招待講演)2012年7月30日,京都大学.

松本マズミ「最新言語理論の英語教育への活用」平成23年度大阪教育大学研究成果発表会,2012年3月22日,大阪教育大学柏原キャンパス.

西光義弘「日本人英語学習者の誤答を直す方法~日英語対照研究の知見~」橋渡しことばの会第1回講演会(招待講演)2012年2月18日,大阪教育大学天王寺キャンパス.

長谷川ユリ「留学の意義~なぜ留学が必要なのか~」第2回国際センターシンポジウム 留学で広がる可能性(招待講演)2011年12

月21日,大阪教育大学柏原キャンパス.

長谷川ユリ「大学間国際ネットワークを活用した取り組み」第7回大学間交流国際フォーラム(招待講演)2011年7月9日,広島大学.

〔図書〕(計3件)

松本マズミ「生成文法による中間構文の分析が英語教育に対して果たす役割」藤田耕司・松本マズミ・児玉一宏・谷口一美編『最新言語理論を英語教育に活用する』350-360,開拓社,2012,485.

西光義弘「学習者の誤用を言語学的に説明する試み」藤田耕司・松本マズミ・児玉一宏・谷口一美編『最新言語理論を英語教育に活用する』12-22,開拓社,2012,485.

松本マズミ「第8章複文レベルの構文」畠山雄二編著『大学で教える英文法』169-191,くろしお出版,2011,245.

〔その他〕

ホームページ等

<http://middle.osaka-kyoiku.ac.jp/>

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

松本 マズミ (MATSUMOTO, Masumi)  
大阪教育大学・教育学部・教授  
研究者番号: 10209653

### (2) 研究分担者

長谷川ユリ (HASEGAWA, Yuri)  
大阪教育大学・国際センター・教授  
研究者番号: 90273747

西光義弘 (NISHIMITSU, Yoshihiro)  
神戸大学・名誉教授  
研究者番号: 10031361